

# 昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について

## 建 議

平成26年9月

昭島市社会教育委員会議



## 目次

はじめに .....	1
第1章 昭島市における地域の現状 .....	2
第1 地域の「自慢できること」から見える現状 .....	2
第2 地域の様々な団体から見える現状 .....	2
1 社会教育関係団体について .....	2
2 ウィズ・ユースについて .....	3
3 子ども会について .....	3
4 その他の団体（自治会、シニアクラブなど）について .....	3
第3 市民意識調査から見える現状 .....	4
第2章 昭島市の地域の現状から見られる傾向 .....	5
第1 地域に見られる傾向 .....	5
第2 市民に見られる傾向 .....	6
第3章 昭島市における地域の活性化に向けた社会教育についての検討 .....	7
第1 第55回全国社会教育研究大会（三重大会）からの検討 .....	7
第2 東京都市町村社会教育委員連絡協議会第2ブロック研修会からの検討 .....	7
第3 東京都市町村社会教育委員連絡協議会第交流大会・全体研修会からの検討 .....	7
第4 栃木県宇都宮市における「小中一貫教育と地域学校園」の取組からの検討 .....	8
第5 つつじが丘・プレイシア地区における中学生参加の防災訓練からの検討 .....	8

第4章 昭島市における地域の活性化に向けての提言～社会教育の観点から～ .....	9
第1 市民に向けた方策 ～「元気都市あきしま」を身近に感じられるイメージづくり～ .....	9
1 市民の力を借りる .....	9
2 情報の伝達の仕方を工夫する .....	10
第2 地域に向けた方策 ～連携をとるために、既存の組織と人を活かす～ .....	11
1 ジャンルを超えてつながる<知り合う、わかりあう、未来へつなげる> .....	11
2 若い力を活用する .....	12
3 イベントを活用する .....	13
おわりに .....	15

## はじめに

産業や物流が発達するにつれて、日常生活に必要な物資は容易に手に入る世の中になった。また、公共・民間の各種サービスが充実するとともに、他人に頼らなくても生活していける時代にもなった。

さらに、ライフスタイルや価値観の多様化は、他人との交わりを鬱陶しく感じる風潮も生じさせてしまった。近隣の人達だけでなく家族の中においてさえ、孤立や孤独を起す要因にもなっている。

学校・家庭・地域の面でとらえると、核家族化等によって家庭の教育力が低下して、学校がその受け皿になっている側面がある。その学校も事件・事故・災害が起こるたびに求められる役割が増大して、教職員だけでは対応が難しくなり、地域の力を必要としている現状がある。今までも地域が家庭や学校に果たしてきた役割は大きかったが、近年はさらにその重要性が増している。

人々の地域への帰属意識が薄れる反面、地域に期待される役割はむしろ増えている。この認識にたって、昭島市社会教育委員会では「昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について」を今期のテーマとして取り上げた。

昭島市社会教育委員会議

## 第1章 昭島市における地域の現状

本章では、社会教育委員それぞれの立場から見える現状等を意見交換、または情報収集した中から、昭島市における地域の現状について整理した。

### 第1 地域の「自慢できること」から見える現状

昭島市は面積が17.33平方km、人口が約11万人である。大きすぎず小さすぎず適度な規模の市であるといえる。

昭島市は握り拳のような形をしていて、いわゆる飛び地が無い。市の南側を流れる多摩川に向かって緩やかに傾斜しているが、全体的には概ね平坦であり、山間部や過疎地が無いことも特徴の一つである。さらに、市の東西方向にはJR青梅線・江戸街道・奥多摩街道等が走り、交通の便は良い。南北方向は往来が不便だった時期があったが、次第に解消しつつある。

これらの特徴から、昭島市はエリア全体を把握しやすいと考えられる。

また総じて組織も自主自立で確立しているものが多く、施設も整えられており、施設を利用するにあたっての予約システムなど、すでに揃っている現状にあり、ハード面はある程度充実している。ソフト面では、昭島市はイベントが多い。くじら祭りをはじめ、青少年フェスティバル、産業まつり、新春たこあげ大会、各地域での夏祭り等、地域にある各種団体が結束してイベントを行うが、イベントを運営する能力の高さが他のイベントでも活かされるなど、イベント力の高さについては優れたものがある。

### 第2 地域の様々な団体から見える現状

#### 1 社会教育関係団体について

社会教育関係団体として登録している団体の趣旨が多岐にわたっている現状がある。趣味の活動を行うにあたり、市の施設の利用を主目的とした団体が多く、純粋に社会教育活動として意識しているところは少ないのではないかという現状認識がある。

一方、特にスポーツ活動を長く継続していく中で、活動を楽しむだけでなく、健康維持や生活への生きがいにつながっている。それだけでなく、暮らしている地域の学校施設を利用していることから、初めは仲間内だけの活動であったものが、その小学校区の大人や子どもも交えて活動するようになった団体もある。このように、活動を通して大人たちにとっては地域の顔見知りが増え、子どもたちにとっては卒業後も部活動として継続するなど、団体の存在が自然に社会教育活動へとつながっているケースもある。

## 2 ウィズ・ユースについて

青少年とともにあゆむ地区委員会（ウィズ・ユース）（以下ウィズ・ユースという。）は昭島市の各小学校単位に組織されている。青少年健全育成活動として、各地域で様々な行事を運営したり、青少年フェスティバルや、新春たこあげ大会など全市的な行事を実施する中核になったり、リーダー講習会を行っている。地域によっては、子ども会がなくてもウィズ・ユースがとりまとめて機能しているところがあるなど、その役割は大きい。

## 3 子ども会について

子ども会については、全市の児童数から加入率をみた場合、25%ほどの加入率で、子ども会自体が弱体化している現状は否めない。しかし、地域の中でウィズ・ユースの活動の窓口的な役割を担っていたり、地域の祭などの手伝いや参加の動員の役割を担うなど、その存在意義は大いにある。また、防災の観点から子ども会に加入したいという傾向もみられる。できるだけ役員や会員の負担を減らしながら、工夫して楽しめる活動を展開している子ども会もある。ただ、役員の成り手不足は大きな問題となっている。子ども自身が忙しくて子ども会活動ができないのに、親は役員で参加しなければならない場合や、他団体との兼ね合いで夜の会合が多く、子どもの預け先の確保などに苦労している家庭が多いなど、課題も大きい。

## 4 その他の団体（自治会、シニアクラブなど）について

東日本大震災以降、防災に関する活動を自治会が中心となって行うなど、自治会が地域に積極的に働きかける動きも見られる。つつじが丘・プレイシア地域では、地域の合同防災訓練に中学生も参加し、学校ではなく地域主導で全校生徒が全住宅をまわる訓練等を行った。この合同防災訓練を通して、地域の人々と中学生がつながり、顔見知りになる機会が得られたことは、非常に評価できる。

シニアクラブの「笑顔の訪問」活動は、家族介護から地域社会での介護へと広がりをもたせ、会員同士の交流や誰もが気軽に話し合える雰囲気づくりに貢献している。こうした地域活動は、介護を必要とする高齢者やその家族に留まらず、高齢者、障害者、また外国籍の方など地域社会で生活するうえで何らかの支援を必要とする方に地域の中で分け隔てなく生き生きと暮らせる地域社会を目指すものとなっている。つまり、当事者の方たちだけでなく、地域に暮らしている人々にとっても、地域が単なる「生活の場」から「誰もが住みやすいまち」へ発展していくものになるよう、こうした活動がシニアクラブ以外の団体活動にも広がっていくことが期待される。

### 第3 市民意識調査から見える現状

平成26年2月に報告された「昭島市 市民意識調査」のアンケート結果について、特に「地域活動・生涯学習」についての項目に対し、分析を行った。

#### 【市民意識調査「5. 地域活動・生涯学習」について（抜粋）】

##### （1）行っている地域活動

結果	分析
「自治会などの地域貢献活動」(17.1%)が最も多く、次いで「スポーツ・レクリエーション活動」(8.5%)、「音楽、美術、趣味などの文化芸術活動」(8.0%)などの順となっている。また、「していないが、機会があればしたい」(33.2%)が3割以上、「していないし、今後もするつもりはない」(28.6%)が3割近くとなっている。	「していないが、機会があればしたい」(33.2%)ということの真意はどこにあるのか。ここに属する人たちに着目して、引き上げる方法を検討していくことも考えられるが、はたして、「していないし、今後もするつもりはない」という方に限りなく近いのではないか。

##### （2）地域活動に参加できない要因

結果	分析
「活動する時間がない」(42.6%)が4割以上と最も多く、次いで「参加するきっかけが得られない」(27.3%)、「団体や活動内容に関する情報がない」(19.6%)などの順となっている。	「やってみたら意外と楽しい」ということはよくあることなのだが、誘い出さなければできないということか。情報や誘いを待つ受け身的な要素も強いことが感じられる。

##### （3）市民活動のために市が力を入れるべきこと

結果	分析
「活動のための情報の提供」(62.2%)が6割以上と最も多く、次いで「活動場所の提供」(29.9%)、「活動に必要な研修会や講習会の開催」(24.8%)、「活動に必要な機材や資金的援助」(23.8%)、「活動中の事故に対する保険制度」(8.3%)の順となっている。	広報は全戸配布されており、ホームページもかなり充実しているので、情報提供はかなり進んでいるのだが、どういう情報を求めているのか検証の必要があることと、逆に市の情報にあまり敏感ではないということも感じられる。

これらのことから、恩恵を受けるはずの市民と、提供する側の様々な関係部署や関係団体との間には、意識・感覚の面で温度差があることがうかがえる。



## 第2章 昭島市の地域の現状から見られる傾向

本章では、昭島市における地域の現状（第1章）から、全体的にどのような傾向が見られるか、地域に見られる傾向と、市民に見られる傾向に分けて整理した。

### 第1 地域に見られる傾向

地域でよく聞かれる声として、「どの団体にも同じような人が関わっており、どこへ行っても同じような顔ぶれであることが多い」というのがあるが、はたしてそれでよいのかということだ。一人の人が、いくつも役を抱えることは、負担感が増すうえ、役員の成り手が見つからないという傾向になる。これにより、メンバーが高齢化し、後継者問題から活動のマナー化などが生じる一因にもなる。ただし、同じような顔ぶれだからこそ、いろいろな場面や分野で連携が取りやすいという利点もある。

自治会や子ども会・PTAなどでも、同じく役員の成り手不足の問題はよく耳にする。これらの団体の多くは、役員が「単年度制」で選出されおり、どのように役割を担えばよいかわからないという人にとっては、役員を引き受けること自体が負担となっている。そのような中で、子供の健全育成を含めた地域活動に関わる従来の役割が、加入率の低下が著しい子供会に代わってウイズ・ユースや、スポーツ団体などが担うようになり、組織の持つ「役割」が変化・移行している傾向が見られる。

地域には、新興地域と歴史ある地域などの地域の成りたちにおける特色や、住民の構成、その土地における産業・商業・宅地など様々な用途の違いから、独自の地域性が育まれている。それにより、地域のあり方や、お祭りなどイベントへの取り組み方、人と人との関わり方などその地域ならではの味わいある文化が培われている。一方で、地域の成り立ちの違い、集合住宅地と団地など住宅の密集度の違い、生活様式の違い、住民の移動による人口変動の有無など、様々な違いから、同じ地域の中でも、住民が持つ地域に対する意識や地域活動に対する価値観等が多様化していることもうかがえる。

このことから、役割の変化・移行や生活様式・価値観等の多様化という傾向は、一見問題であるかのように映るが、そうではない。いろいろなものが「ある」ことで地域が成り立っていることからすれば、アプローチの仕方によっては、活性化につながる要素があらゆる分野で揃っていると考えられる。

## 第2 市民に見られる傾向

市民個人の地域活動に対する積極性について市民意識調査を分析したところ、自ら地域に関わりを持とうとする意識と意欲は、どちらかといえば、弱い傾向にあることがわかった。市民意識調査において「機会があれば地域活動をしてみたい」といった回答に、なぜなるのか。それは、言い換えるならば、市民の多くは「今くらいでちょうどよい」と感じながら、それなりの充足感をもって生活が営まれており、現実的に情報に困っているわけでも、地域活動の必要に迫られているわけでもないということではないか。ということは、「今くらいでちょうどよい」と感じている人たちの意識を、地域との関わりを持つことで、より「よい」と感じられるように働きかけることが、必要なのではないだろうか。

一方で、我々は、市民の中でも特に介護が必要な高齢の方や障害のある方たち、あるいは外国から来た方たちについて話し合った。そして、当事者である方たちやご家族にとって、地域の中での理解や支援の体制が整っているとは言い難く、同じ地域の中に住んでいながら地域活動に参加しにくい状況にあることがわかった。そういう方たちにも目を配り、地域に住むあらゆる人にとって、様々な地域活動に参加する機会が得られる地域が望まれる。

これらのことから、支援する側とされる側という意識を超えた共生社会が築けるように、市民一人ひとりの意識や理解を高める働きかけを地域の中で行なっていくことも必要である。その要素は、本章第1でも述べたとおり、地域の中にすでにあると考えられる。

### 第3章 昭島市における地域の活性化に向けた社会教育についての検討

本章では、参加した研修会や、他市の視察、市内地域での事例から、昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について討議した検討事項について整理した。

#### 第1 第55回全国社会教育研究大会（三重大会）からの検討

（平成25年10月23～25日 於：三重県伊勢市他）

今回の全国社会教育研究大会（三重大会）のテーマが「学校、家庭、地域を大切にしたい人が輝き、協創する社会教育の推進」。「協創」という言葉がずいぶん強調されていたが、「今ある良さに気付く。今ある良さをつなぐ。それぞれの良さを共有する。」ことが、地域での活動を活性化させるポイントであることが共通して語られていた。地域にある良さをより幅広くとらえ、それぞれの団体の活動を互いに認識し合う。そこから地域の活性化に向けて互いにできることについて共有し、連携しあうという取組ができるのではないかという方向性を見ることができた。

#### 第2 東京都市町村社会教育委員連絡協議会第2ブロック研修会からの検討

（平成25年11月9日 於：国分寺市）

東京都市町村社会教育委員連絡協議会のブロック研修会では、「地域教育力を高めるための具体的な取組～学校を核にして」と題して、平成23年度から始まった、コミュニティスクール推進校になっている国分寺市立第九小学校サマースクールについての事例発表が行われた。国分寺市では、市と大学の連携ができあがっており、そういう部分で昭島は難しいところがある。しかし、例えば他市との連携をとることで、そうした大学等との連携から地域の教育力を上げることが可能になるのではないかという、幅広い連携について考えるきっかけとなった。

#### 第3 東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・全体研修会からの検討

（平成25年12月7日 於：羽村市）

この交流大会・全体研修会では、社会教育委員のあり方や役目について今一度振り返る機会となった。それ以外に、研修のスタイルのあり方が、ただ聞いて学ぶ研修だけでなく、自ら発言するような形式の研修へと流れが変わってきたことを多くの委員が実感した。昭島市の社会教育委員会がまさにその形で、様々な立場の人が集い話し合う場になっている。このようなグループディスカッション形式から、新しいアイデアや方向性が見つかるということが改めて確認できた。

#### 第4 栃木県宇都宮市における「小中一貫教育と地域学校園」の取組からの検討

(平成26年1月31日 於：栃木県宇都宮市)

宇都宮市は、人口も規模も昭島市の5倍の大都市であるが、平成24年度から全市的に「小中一貫教育と地域学校園」の取組を行っている。中1ギャップの問題の解消がその大きな目的だったようだが、小中の縦のつながりと、学校を核として地域の教育資源を有効に活用しながら、社会総ぐるみの人づくりを横のつながりとして、一体的に推進しようとしているようだ。このように全市的に取り組むのはなかなか厳しいものがあるだろうが、大なり小なり似たような取組はすでに昭島市にもあるのではないかと。

さらにそれを市民に意識づけるため、宇都宮市では、「地域コーディネーターお助けブック」「ようこそ！！『学校支援ボランティア』へ」など様々なガイドブックやリーフレットを積極的に活用している。それらのガイドブックやリーフレットが非常に魅力的で分かりやすいものが多く、市民へのアピールする力として機能している点が非常に参考になった。

連携のあり方として、社会教育委員会議の中ではさらに、小・中の縦の連携だけでなく、小・小、中・中の横の連携も必要ではないかという話題も出た。連携のあり方についても、幅広い視野で捉えて考えていくのもよいのではないかと、という方向性も見ることができた。

#### 第5 つつじが丘・プレイシア地区における中学生参加の防災訓練からの検討

平成25年9月29日に瑞雲中学校と地域（つつじが丘ハイツとプレイシア計3,200世帯）の合同で防災訓練が行われた。瑞雲中学校の生徒550人が全員参加し、地域主導のもと、中学生が安否確認や誘導を行った。防災の観点から、平日の昼間という時間帯は、大人は働きに行っていて不在、高校生・大学生は地元にはいない。いるのは小学生・中学生・子ども・高齢者であり、中でも一番頼りになるのは中学生の力ではないかと考える。

地域の側からすると、中学生の協力が頼もしく、学校の側からいえば、中学生は、誰かに頼りにされたときに、地域を愛し、地域の中に自分の居場所が生まれることになる。それは、生徒たちにとってもこれからの成長の中で貴重な大きな力になることが期待され、双方にとって効果の高い取組であったといえる。この取組から中学生の力を活用することを地域の活性化のひとつの要素にできるのではないかと、地域内の連携をとるにあたって、大いに参考にできる点があると思われる。

## 第4章 昭島市における地域の活性化に向けての提言～社会教育の観点から～

地域を活性化させるには、市民一人ひとりが元気であり、家庭が元気であり、そのうえで地域をよりよくしていこうという意欲が湧くことが、その原動力となる。地域の中で生活している市民一人ひとりや家庭、団体が、地域の中でどのように存在意義を持ち、お互いの存在を認め合い、地域に関わりを持とうとしたり、地域活動を担おうとしたりする意識を育む。そうした意欲や意識を引き出し、育むことこそ、社会教育が持つ役割ではないかと考え、以下のことを昭島市の社会教育の取組あるいは実践の場として提案する。

### 第1 市民に向けた方策 ～「元気都市あきしま」を身近に感じられるイメージづくり～

#### 1 市民の力を借りる

市民意識調査の分析から、市民に受け身的な要素が強いこと、恩恵を受けるはずの市民と、提供する側の様々な関係部署や関係団体との間には、意識・感覚の面で温度差があることがうかがえた。市民の中で、「今くらいでちょうどよい」と考えている人たちに対し、よりよいものを求める意識へと向上を図るアイデアとアプローチとして、「市民の力を借りる」ための方策を検討する中で、市の掲げる昭島市の将来都市像「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市あきしま～人も元気 まちも元気 緑も元気～」をもっと身近に感じられるイメージ作りということ考えた。

##### ①□地域について語り合う場を設ける

昭島市が掲げる将来都市像のキャッチフレーズ「元気都市あきしま」について、市民が具体的にイメージすることができ、目的意識を持つことができる場として座談会や懇談会等の開催を提唱する。

座談会等では、語り合いの中から気付きや発見を持つことができ、「自分（たち）にも何かできることがある」と連想することで、将来の予想図がより明確になる。そして、その場で得られる人と人とのつながりを糧に、自分たちの力で「できること」に取り組み、発展させていくことが、将来の予想図の実現を可能にする。それは、地域の実情に合ったまちづくりへの源となると考える。

##### ② 地域の成りたちを学ぶ

自分たちの暮らしている昭島市あるいは地域が「どんな成りたちのまち」なのかを知ることも、郷土愛を育むという意味で、大切な要素であると考え。市内の小学生は3年生の時に昭島の歴史について学ぶ機会があるが、大人になってから転入

してきたり、外国から来た方々にとって、それらを学ぶ機会はどうもない。普段の生活圏における視点とは異なる、「まちの成りたち」という視点から地域を顧みることによって、地域に即した地域の活性化に向け、新たな取組へつながる可能性が期待できる。地域の「成りたち」を「地域の住民」から学ぶ機会が得られることができれば、同じ住民どうしのつながりも生まれてくることも期待できる。

昭島市あるいは地域の成りたちを学ぶことは、地域を知ることでもある。さらに、学ぶだけでなく、これからの地域に対するビジョンを語りあえる場も同時にあれば、地域に関わろうという意欲にもつながる。そのため、幅広い世代の市民に向けて、昭島市あるいは地域の成りたちを学ぶ場の提供を提唱する。

## 2 情報の伝達の仕方を工夫する

市では、「広報あきしま」や公式ホームページ、ツイッターなど様々なツールを活用し、市民への情報提供を行っている。内容は充実しており、かなりの情報をそこで得ることができるよう工夫されている。しかし、市民意識調査の中では、「市民活動のために市が力を入れるべきこと」として、「活動のための情報提供」が62.2%と高く、情報はすでに提供されているにも関わらず、情報提供を求められるという状態にある。それでは、情報が効果的に活用されているとは言い難い。

情報は「何のために、誰に届けるか」を明確にし、「ありとあらゆる手段を使って届けていく」ことを中心に、その方策を検討した。

### ① メディアを活用する

メディアの積極的な活用は、市民が関心を持ち、新しい参加者を得る機会にもつながる即効性のある手段であるため、積極的に活用することを提唱する。そのためには、マスコミに関心を持ってもらえるような工夫も望まれる。

### ② わかりやすいリーフレットなどで啓発する

リーフレットなどは、何のためのもので、誰を対象としているかを明確にすることで、啓発などに効果的だ。宇都宮市で作成されているものは大変魅力的でわかりやすく、視覚的にも入ってきやすいものが多く、そのガイドブックやリーフレットが、何のためのもので、誰を対象としているかが明確である。例えば、「地域コーディネーターお助けブック」では、地域コーディネーターのための地域活動心得や学校支援活動をスムーズにするコツなど、初歩的なことも記載されている。それにより市民がその事業について知るだけでなく、事業に関心を持たせ、その事業を行うことによって得られる効果やその成果の広がりが、読み手である市民にとって想像しやすいものになっている。同じように、リーフレット「ようこそ！！『学校支援

ボランティア』へ」は、円滑に活動を始めるための学校支援ボランティアの手引きで、A3の両面に「学校支援ボランティア活動をするときのコツ・臨み方Q&A」や「子どもとの接し方」がイラストでわかりやすく示されている。このように端的な形でまとめていると、市民も事業そのものについて理解しやすく、必要なところへ必要な情報を届けることができる。様々な事業において、目的に応じたリーフレットの作成と活用を提唱する。

### ③ 掲示板のよさを活かす

市民の視覚に訴えるものとして、地域の各所にある掲示板をもっと活用してはどうだろうか。④でも述べるが、インターネットなどによる情報提供はもちろんだが、そういった方法では情報を得ることができない人たちにとっては、情報を掲示板から得るといことも多々あるだろう。

地域の掲示板は、その地域における身近な情報であったり、あるいは市の情報が掲示されていることが多く、掲示板を意識して見るというわけでもなく、何気なく情報が視覚的に入ってくる効果がある。また、掲示された情報とそれを見る人だけの関係性だけでなく、掲示板を介して生じる人と人との会話などによるつながりという関係性も、地域の中の掲示板ならではの光景である。掲示板の活用についても、「情報を市民にアピールする場」のひとつとして、今後さらに利用価値を高めていくことが望まれる。掲示板の活用の仕方について検討する機会をつくり、さらに有効活用できるよう提唱する。

### ④ ITを活用する

現代は、情報を得るためのツールが様々ある。そのため、市民の情報収集の仕方に合わせた情報の発信の仕方というものも考えていかなければならないと考える。ホームページやツイッターは、そこへアクセスしたり、フォロワーになることで得られる情報で、興味関心の高い人には有効である。しかし、そうではない人たちにとっては、「情報が届いていない」と思われてしまうこともある。市民が情報をどのように収集しているかを探り、例えばメール配信など、簡単な操作で直接情報を得ることができるようなシステムとその周知を図っていくことを提唱する。

## 第2 地域に向けた方策 ～連携をとるために、既存の組織と人を活かす～

### 1 ジャンルを超えてつながる<知り合う、わかりあう、未来へつなげる>

地域には既存の組織・各種団体があるが、一部には根付いているものの、多くの住民には知られていない場合や、いくつかの団体が同じような活動をしていて、住民にとっ

てどの団体が活動の運営を担っているのかわからないことがある。その隔たりから各々の活動が地域の中でつながりや広がりへと思うように結び付かず、役員の高齢化や、役員の成り手不足などの問題が生じているとも考えられる。

地域の中に点在している各種団体の代表者や、自治会、商店会、商工会の方たち、各種委員会の委員である方たちなど様々な分野の人たちが出会う場があるとよいのではない。そういった場でお互いの活動を紹介・報告しあうことで、人と人とがつながるだけでなく、地域において実践されている様々な活動が見えたり、活動をしていく上で課題となっていることを共有できる。知り合うことにより、お互いの活動の認識が深まり、連携・協力体制をとりやすくなるなど、地域の中での活動をそれぞれが見直し、関わりあうことができるようになると思う。

また、それぞれの目的で地域活動を担うあらゆる分野の人がつながることで、互いに学びが深まり、視野が広がってくる。それは共生社会の実現に向けて、各地域の実情に合う地域の活性化に向けた取組に発展することが大いに期待できる。

以上のことから、地域と行政が協力して、それぞれの地域の中の今ある組織、今いる活動の実践者たちなど、今ある良さをつなぐという意味でも、地域にいる様々なジャンルの人たちが一堂に会する機会を作ることを提唱する。

## 2 若い力を活用する

つつじが丘・プレイシア地区で行われた地域主導の防災訓練の事例をもとに、若い力の活用について検討した。日常において地域にいる人は誰かということを見たとき、大人たちは働きに出かけ、高校生以上の若者も通勤通学で不在となり、いるのは高齢者や小さな子供、小学生や中学生が大半ということになる。では、有事において地域の中で頼りになるのは誰かということに着目すると、若さ・体力・行動力を兼ね備えた中学生であり、実際の防災訓練でも大きな力・支えになることが実証された。もちろん、地域の方たちの力添え、学校の全面協力があってこそだが、中学生にとって、自らが暮らす地域に目を向ける機会となる。そのうえ、地域の中で自分たちが役立つという実感を得ることは、地域・社会とのつながりを感じられる貴重な経験となる。また、地域に直接関わることで地域には高齢の方たちや、障害のある方たち、外国籍の方たちなども含め、様々な人たちが暮らしているということを知ることにもできる。この事例は、これからの地域・社会を担う若い人材の健全育成を地域で行うことができるということも実証された。

市内に中学校は6校あり、地域の中に設置されているので、地域と中学校との連携が、地域の活性化に向けた要として機能することができる。また、やがて中学生になるその地域の小学生や小さな子どもたちにとって、中学生が地域で活躍する姿は、自分たちの将来の姿を想像しやすく、成長することへの楽しみや憧れを育むこともできるという効



果も期待できる。

このことから、若者を地域に取り込む手段としても、地域と中学校が連携することにより、主に中学生とともに地域活動を進めていける環境づくりを醸成することを提唱する。

### 3 イベントを活用する

地域が活性化して得られるものは何か。それは、地域の住民が「つながり・ふれあう」ことを通して、地域に対する「安心・安全」が生まれ、「この地域に暮らしていてよかった」と実感することではないだろうか。そこで着目したのが市内で行われている「イベント」である。

昭島市にはくじら祭りをはじめ、青少年フェスティバル、産業まつり、新春たこあげ大会、地域で行われる盆踊りや夏祭りや運動会など、各種イベントが多く実施されている。その中で、市民の多くにイベントを運営する力があり、また別のイベント等でそのノウハウが生かされている様子が浮かび上がってきた。そこから、「イベント」には、地域の連携を図り、活性化させていく力があるのではという結論に至った。

ここでは、特に地域における「イベント」を中心に、前述第4章第2の1・2の提唱を踏まえながら検討した。

地域における「イベント」は、自分たちの生活圏内で、世代やジャンルを超えて集うことができる場である。「同じ地域に暮らしている」という共通項から、連携を取りやすく、人はもちろん学校や地域の商店や団体も巻き込むことができる。それにより、どんな人が地域にいて、どういう活動をしている人なのかを知ることでもでき、自分の暮らしている地域を改めて見つめ、知る機会にもなる。

イベントに携わることを体験すると、イベントの運営力が身につくだけでなく、有事の際に必要なテントの設営や炊き出しがいつでもできるノウハウや、救助活動・救護活動に必要なノウハウも獲得できる。いわばイベントが体験活動と育成の場にもなる。先に述べた若い力を活用する例として、地域のイベントなどで地域と学校が連携し、中学生がスタッフとして一緒に関わることは、イベントにそうした体験活動と育成の場としての意味づけもできる。

それだけでなく、地域のイベントから自然に学んだ運営力や様々なノウハウを応用すれば、市民の活動・団体活動を行っていく上でも活かすことができる。どのように運営すれば、人が集まり、自分たちの活動の幅が広がるか。また他の人や団体と連携することは、新たにできることが見つかる機会にもなるという発想につながる。そういったことも普段接点のない人々とのつながり・ふれあいができる地域のイベントを体験することから得られ、団体の活動そのものもより活発になるのではないか。

ただ、現状では、もしかしたら多くのイベントに対し、市民にどこかしら「やらされ感」があるのではないかということも否めない。大変な労力がかかるものではあるが、

その大変さを共有でき、労りあえる人間関係づくりも大切になってくる。

地域でイベントを開催するにあたって、地域の自治会や主催団体が、連携し合うことはもちろん、そのイベントに誰がどのように関わり、どのような人を巻き込むとより有意義なイベントになるかを考えることが必要だ。また、そのイベントが開催されるように至った歴史的背景を地域の住民や市民が知ることも必要である。つまり、今あるイベントを多角的に見つめ、多くの人に関わり合いを持てるようにうまく意味づけをすることにより、イベントに様々な「ねらい」を持たせることができる。

以上のことから、地域におけるイベントについて振り返る機会を作り、地域住民が地域の活性化も視野に入れたイベントを行えるような働きかけを提唱する。

## おわりに

「昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について」をテーマとするに際して、当初の案では“活性化”ではなく“再活性化”としていた。“再活性化”には衰退からの復活という意味合いが含まれる。しかし、委員会で調査や討議を重ねていくうちに、部分的には不活発になっている地域組織はあるが、全体的には活発に活動している組織が多く存在していることを確認した。よって、“再活性化”の“再”を削り、より充実を図ることを主目的にしたテーマとした。

このような認識にたって、地域の今ある良さを活かすことを検討の柱とした。

地域には成熟した組織もあれば、新しい組織もある。それぞれは活発な活動をしているが、有機的に連動しているとは言い難いという事実も判明した。これは、縦割り行政もその一因になっていると考えられる。今後、行政と市民が協同して、地域のさらなる活性化に取り組むことを期待する。

1 第27期 昭島市社会教育委員名簿

議長	石原	正昭	
副議長	五十嵐	榮司	(平成25年9月14日まで)
〃	山下	博一	(平成26年3月31日まで)
	※ 副議長は、平成25年10月30日から		
委員	河瀬	正	(平成25年3月31日まで)
〃	土屋	正登	(平成25年4月11日から)
〃	喜多野	雅司	(平成26年4月17日から)
〃	原島	久美子	
〃	長瀬	高志	
〃	瀬戸本	むつみ	
〃	三田	勝	
〃	安芸	進	

## 2 審議日程

第 1 回	平成 24 年 1 1 月 27 日
第 2 回	平成 24 年 1 2 月 20 日
第 3 回	平成 25 年 1 月 25 日
第 4 回	平成 25 年 2 月 22 日
第 5 回	平成 25 年 3 月 27 日
第 6 回	平成 25 年 4 月 24 日
第 7 回	平成 25 年 5 月 29 日
第 8 回	平成 25 年 6 月 26 日
第 9 回	平成 25 年 7 月 24 日
第 10 回	平成 25 年 8 月 7 日
第 11 回	平成 25 年 9 月 24 日
第 12 回	平成 25 年 10 月 30 日
第 13 回	平成 25 年 11 月 27 日
第 14 回	平成 25 年 12 月 18 日
第 15 回	平成 26 年 1 月 27 日
第 16 回	平成 26 年 2 月 26 日
第 17 回	平成 26 年 3 月 28 日
第 18 回	平成 26 年 4 月 23 日
第 19 回	平成 26 年 5 月 28 日
第 20 回	平成 26 年 6 月 25 日
第 21 回	平成 26 年 7 月 30 日
第 22 回	平成 26 年 8 月 27 日



昭島市における地域の活性化に向けた  
社会教育について

建議

平成26年9月17日

昭島市社会教育委員会議

発行：昭島市教育委員会事務局生涯学習部社会教育課

〒196-8511 東京都昭島市田中町 1-17-1

電話 042-544-5111（内線 2259）